

シリーズ「遺跡を学ぶ」

152

中世武家庭園と 戦国の領域支配 江馬氏城館跡

三好清超

新泉社



中世武家庭園と 戦国の領域支配 ―江馬氏城館跡―

三好清超

【目次】

第1章 武家庭園の発見……………4

- 1 江馬の殿さまの館跡……………4
- 2 あらわれた庭園遺構……………6
- 3 国史跡・国名勝へ……………12

第2章 北飛驒に雄飛した江馬氏……………15

- 1 中世高原郷と江馬氏……………15
- 2 室町幕府の武士として……………16
- 3 戦国時代と江馬氏の滅亡……………20

第3章 姿をあらわした武家館……………23

- 1 江馬氏下館の変遷……………23
- 2 武家庭園の実像……………35
- 3 館で示す武家の権威……………39

第4章 北飛驒支配の実像……………43

- 1 中世武家の領域支配とは……………43
- 2 本城・高原諏訪城……………46
- 3 館周辺に広がる集落……………54
- 4 隣接する山寺と城……………57
- 5 領域をとりかこむ山城群……………64

第5章 庭園の復元と未来……………81

- 1 庭園の復元……………81
- 2 江馬氏城館跡の価値……………87
- 3 江馬氏城館跡のめざす姿……………90

引用参考文献……………92

編集委員

勅使河原彰(代表)

小野 昭

小野 正敏

石川日出志

小澤 毅

佐々木憲一

装 幀 新谷雅宣
本文図版 松澤利絵

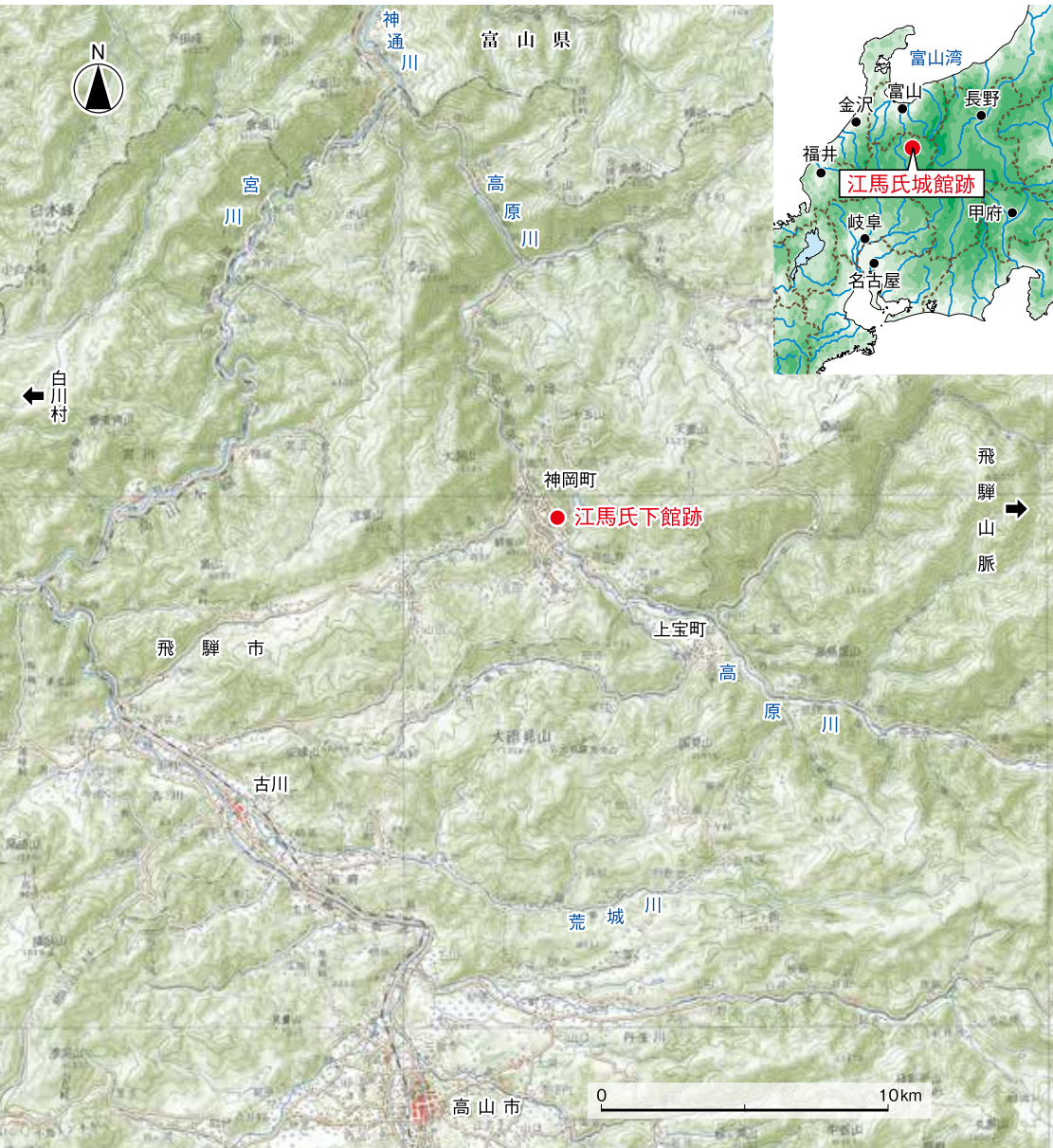


図1 ● 江馬氏下館跡の位置
岐阜県飛騨市の中央部、神岡町の高原川が形成した河岸段丘上にある。国史跡「江馬氏城館跡」は周辺の山城も加えた名称で、武家館は「下館跡」とよばれている。

第1章 武家庭園の発見

1 江馬の殿さまの館跡

水田に巨石が五つ、顔を出していた。地元では「江馬の殿さまの館跡」とよんでいた。ここは岐阜県飛騨市神岡町の中央部にある殿地区で、「江馬の殿さま」とは室町時代から戦国時代にかけてこの地を治めた武将、江馬氏のことである。

飛騨市は、北は富山県富山市、南は岐阜県高山市、西は白川村に接し、岐阜県の県庁所在地岐阜市から北へ約一五〇キロ、飛騨地方の中心地である高山市からも北へ約一五キロある岐阜県最北端にある自治体である(図1)。

周囲は標高三〇〇〇メートル級の飛騨山脈(北アルプス)などの山々にかこまれ、総面積約八〇〇平方キロのうち森林が九三パーセントを占める。東西に長い市域の南東から中央部を高原川が北上し、西側は宮川が北上し、富山県境で合流して神通川となって富山湾に注いでいる。



図2 ● 復元された江馬氏館跡庭園
発掘調査の成果をもとに復元された。室町時代の庭園と会所がセットで復元されているのは、現在、全国でここだけである。国史跡とともに国名勝にも指定されている。

この二つの河川とその支流地域の地形は急峻で、それらの河川が形成したわずかな河岸段丘が可住地である。その面積は約六〇平方キロと総面積の一割を切るほど山深い。市の人口は二万四〇〇〇人弱で、高齢化率は四割、一部を除き特別豪雪地帯である。

神岡町はこの飛騨市のおおよそ中心部に位置し、高原川沿いのもっとも広い河岸段丘に開けた町である（二〇〇四年に近隣三町村と合併して飛騨市となる）。一時期は東洋一の非鉄金属の産出量を誇った神岡鉱山があり、また近年では小柴昌俊（こしばまさとし）さんがノーベル賞を受賞するきっかけとなった研究装置カミオカンデ（現在はスーパーカミオカンデが稼働）で有名である。

一方、それらよりもはるかにさかのぼり、文献資料や絵画資料でしか知られていなかった室町時代の武家館とその庭園の姿を考古学的に明らかにした地でもある。現在、国史跡の江馬氏城館跡・国名勝の江馬氏館跡庭園となっている（図2）。

2 あらわれた庭園遺構

カドミニウム汚染対策から

庭園の発見は一九七〇年代までさかのぼる。一帯は水田であったが、神岡鉱山から排出されたカドミニウム汚染土が広がるとして、一九七〇年以降は休耕田となっていた。その後、カドミニウム汚染対策事業として神岡町内で土地改良工事が実施されることとなり、「江馬の殿さまの館跡」も対象地となった（図3）。

この土地改良工事は、汚染された旧耕作地に客土を運び込み、一帯を大規模にパックし、その客土のうえに新たに耕作土を入れて復旧しようとするものである。もちろん造成の際に削平をとまなうこともあった。

一九七二年に土地改良工事はじまった。当時、神岡町の文化財担当者であった都竹清隆^{つぐきよたか}さんは、「館跡の伝承地にも重機が土を運びはじめたが、いわれがある場所なので調査をおこなう必要性を訴えた」とふり返る。

そして神岡町文化財保護審議会の指導により、町教育委員会が館の伝承地を試掘調査することになった。すると一・五〜二メートルにもおよぶ巨石が散乱していたのである。

これは庭園の遺構ではないか。都竹さんは発見された遺構を評価するため、一冊の本『庭ひとすじ』^{（学生社）}の著者に手紙を書いた。庭園文化研究所の森蘊^{もりおさむ}所長である。都

竹さんの熱意により森所長はすぐに来跡し、巨石は庭園に配置された景石^{けいせき}で、遺構は「室町時代の庭園様式に比定できる」との見解を出した（図4）。この評価により町は発掘調査を継続することを決定する。

この見解が後の保存を決定づけることになったが、このときにはまだ庭園の周辺で土地改良工事が進められていた。

景石、池と館

一九七三年から庭園跡の全体像を把握する調査がはじまった。景石をたんねんに調べ、庭園の池の汀線^{みざわとん}とその形状を把握した。土師器^{はじ}の皿や貿易陶磁器といった中世遺物も出土し、庭園遺構の全体像がほぼ確定された（図5）。

さらに土地改良工事がおこなわれる予定の隣接地でも試掘調査を実施し、池に接続した



図3 ●昭和初期の現地のような
写真中央から左手の水田に巨石が頭を出しているのがみえる。地元には「江馬の殿さまの庭石」という伝承が残っていた。



図4 ●庭園文化研究所・森蘊所長による指導
立っている人物の左端が森氏。森氏は室町時代の庭園様式に比定されるとの見解を示した（撮影年不明）。

これは室町將軍邸を模したものとされる。各地方の守護は在京することが多かったため、京都の文化が室町幕府と結びついた各地の武將によって地方にもたらされた。各地の武將は將軍などの幕府の有力者にならない、武家の儀礼をおこない客人をもてなす会所や庭園をそなえた館

た武將の居館のことである。
 一一世紀後半から一二世紀、平安時代の終わりごろから鎌倉時代にかけて、地方で力をたくわえた武士が農業経営や交易などの拠点として居館を築きはじめる。それは生垣や土塁、堀や溝などがかまれたものであった。それが一三世紀の終わりから一四世紀になると、方形の敷地を土塁や堀、大規模な堀で区画した画一的ともいえる居館に発展する。

ここでいう中世の地方武家館とは、応仁の乱（一四六七～七七年）以前に全国各地で築かれた武將の居館のことである。

地方武家館とは



図6 ● 江上館の方形館（新潟県胎内市）
 奥山荘の惣領地頭・中条氏が築いた本拠地で、方形をしていて周囲を堀でかこんでいる。

この専門性と客観性を確保した調査により、多くの土器、陶磁器類が出土し、庭園跡、建物跡、堀跡といった遺構が明確に把握され、中世の地方武家館が姿をあらわしたのであった。

礎石建物跡や堀跡の存在が明らかになった。このため一九七八年度には調査区をさらに拡大し、周辺の発掘調査をおこなうことになる。それにともない記録作成・保存活用方法の研究のため「江馬館発掘調査会」が結成された。調査会の顧問には森所長、発掘責任者には安原啓二さん（奈良国立文化財研究所）を迎え、一三名で構成された。



図5 ● 姿をあらわした庭園跡（1978年度の発掘調査）
 庭園跡を中心として周辺に建物跡を確認した。写真中央の庭園跡は景石の配置がわかる。その左手で会所と考えられる礎石建物跡を発見した。